

# 密迹金剛力士の一考察

山野智恵

## はじめに

密迹金剛力士は、古くは阿含經などに登場する釈尊の侍衛者である。日本では、山門を守護する「仁王」として広く親しまれている。その尊容の多くは、金剛杵を持ち、上半身裸体の力士形である。この密迹金剛像の起源は、インドに求めることができ、ガンダーラ、マトゥラーの仏教美術の中にも、力士形の密迹金剛の作例が見られる。密迹金剛は仏伝図の中に頻繁に現れ、特にガンダーラでは、燃灯仏授記から、般涅槃に至るまでの様々な場面に登場している。

阿含經に説かれる密迹金剛は、釈尊の教化に従わない者を降伏するヤクシャ (*yakṣa*) として活躍している。この降伏譚にはヴァリエーションがあり、その対象はジャイナ教徒のサッチャカ (*Saccaka*)、バラモンのアンバツタ (*Ambaṭṭha*)、または悪龍のアパラーラ (*Apalāla*) であつたりする。密迹金剛の活躍の場は、仏伝が伝承されていく中でさらに広がり、降魔、帰城、般涅槃などのエピソードにも登場していく。

この密迹金剛は、仏伝とともに大乗仏典にも受け継がれ、宝積經典の『密迹金剛力士經』では、主人公として抜擢されるに至る。この經の中で、密迹金剛は、如來の秘密を開説するという重要な役割を担つてゐる。梅尾祥雲、神林隆乗の指摘するように、『密迹金剛力士經』における密迹金剛は、密教菩薩の代表的な存在、「金剛手菩薩」<sup>(一)</sup>の前身とされている。

釈尊の侍衛者であつた密迹金剛は、仏教の展開にともない、なぜ、こうした特別な役割を担うに至つたのであらうか。いかなる時代に、いかなる地域で、いかなる人々が、この密迹金剛を信奉するようになつたのだろうか。この問いを明らかにするために、本論では、密迹金剛をめぐる説話を整理し、これらの説話を伝承された背景を考察することにしたい。

### 一、密迹金剛力士をめぐる説話

#### ①サッチャカ、アンバッタの降伏

北伝の阿含經や仏伝では、釈尊の生涯の様々な場面で、密迹金剛が登場してゐるのに對し、南伝では、ジャイナ教徒のサッチャカ、バラモンのアンバッタの降伏譚のみを伝えている。すなわち、中部經典 (majjimanikāya) 中の『サッチャカ小經』(Cūjasaccakasutta)、長部經典 (dīghanikāya) 中の『トハバッタ經』(Ambatthasutta) である。

『サッチャカ小經』は、ジャイナ教徒のサッチャカが、釈尊との論争に敗北し、仏教に回心する話を説いたものである。釈尊がヴァイシヤリーに滯在した際に、サッチャカは、五百人のリッチャヴィ人を率いて、釈尊に論争を挑んだ。そこで、サッチャカは五蘊無我の教えを聞き、はじめ、釈尊の説に反論するが、釈尊の問い合わせに答え

られなくなり、沈黙してしまう。その時、サッチャカの頭上に「金剛手薬叉 (vajrapāṇiyakkha)」が姿を現し、「仏の問い合わせに応えない者の頭は七分に破裂する」とサッチャカを脅し、焰光を放つ金剛杵を振りかざす。これを目にしたサッチャカは恐怖で震え上がり、釈尊に守護を求めたと<sup>(2)</sup>いう。

同様に、『アンバツタ經』には、仏に論争を挑んだバラモンの学生アンバツタが、釈尊の問い合わせに沈黙してしまって、「金剛手薬叉 (vajrapāṇiyakkha)」の出現に戦慄し、釈尊に守護を求めたことが説かれている<sup>(3)</sup>。

討論において相手の質問に答えられず沈黙すると、頭が破裂してしまうというモチーフは、古くは『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド (Bṛhadāraṇyakopaniṣad)』にも見出しがある。那儿では、ジャナカ王の主催した討論会において、ヤージュニヤヴアルキヤの問い合わせに答えられなかつたバラモン、シャーカリヤの頭が破裂したという故事を伝えて<sup>(4)</sup>いる。

インドでは、古くから討論の術が発達し、こうした公開の討論の場で勝敗を決めるルールが定められていた。相手の質問に答えずに沈黙をすることは、論争に敗北したものと見なされ、これによつてその者の頭は破裂すると考えられた。仏伝を伝承した人々は、論争に敗北した者に下される天罰を、眼には見えない存在であるヤクシヤ (yakṣa) やグフヤカ (guhyaka) の仕業として考えたのであろう。

漢訳の阿含經では、ジャイナ教徒のサッチャカの降伏譚は、『雜阿含經』『增一阿含經』に伝えられ、また、婆羅門のアンバツタの降伏譚は、『長阿含經』『佛開解梵土阿歟經』に伝えられている<sup>(5)</sup>。このうち『雜阿含經』の伝承によれば、その時「密迹金剛力士」の姿は、サッチャカのみに見えて、他の者には見えなかつたとされている。漢訳者は、「グフヤカ (guhyaka)」を「跡が見えない者」と理解し、「密迹」の訳語を用いたものと思われる。なお、これらの降伏譚は文献資料に見い出されるのみで、仏伝図のモチーフとはならなかつたようである。

## ②舍衛城の神変

この他にも、漢訳の經典には、密迹金剛が登場する外道の降伏譚がいくつがある。<sup>(7)</sup>

『法句譬喻經』には、釈尊と神力を競おうとしたバラモン、ブーラナカーシャパ（富蘭迦葉）が、金剛杵を振りかざす「金剛力士」の姿を見て、退散する話が伝えられている。釈尊が舍衛城に滞在していた時、ブーラナカーシャパという名のバラモンがいた。ブーラナカーシャパは、人々が釈尊を尊敬するのがおもしろくなく、ブーラナジット王（波斯匿王）に、釈尊と神力を競い、勝った者を王の師とするように申し出た。王は、二者を争わせるための座を設け、そこで釈尊は、虚空に昇つて光明を放ち、東に姿を隠しては西に現れ、身体から火と水をかわるがわる放出するなどの神変を現した。ブーラナカーシャパは、この神変に応じることもできず、頭をうなだれていたが、そこに「金剛力士」が、火をふく金剛杵を振りかざし、「なぜ神変を現さないのか」とブーラナカーシャパに迫つた。これによつて、恐怖で震え上がつたブーラナカーシャパとその弟子達は、ことごとく退散してしまつた。<sup>(8)</sup>

ブーラナジット王が主催した神力合戦の説話は、『賢愚經』『菩薩本生鬘論』『根本説一切毘奈耶雜事』にも伝えられている。<sup>(9)</sup>『賢愚經』では、釈尊の対戦相手は、ブーラナ（富蘭那）をはじめとする六師外道とされ、『菩薩本生鬘論』『根本説一切毘奈耶雜事』でも、六師外道とされている。

この六師外道の降伏譚は「舍衛城の神変」として知られる仏伝図のモチーフとなつてゐる。「舍衛城の神変」図は、釈尊が「身体から火と水をかわるがわる放出した」とする神変を図画したもので、虚空に浮かび、肩から炎、足から水を出す釈尊の姿を表現している。この仏伝図に、密迹金剛が登場する作例は多くはないが、スワート出土のレリーフに、釈尊の向つて左上、金剛杵を持つ密迹金剛の姿を見出すことができる。【図1】。

### ③ 悪龍退治

仏伝中には様々な悪龍退治の説話がある。これらの説話の中で、密迹金剛が重要な役割を演じているのが、アパラーラ龍王の降伏譚である。阿含経の中で、このエピソードについて言及しているのは、『須摩提女経』、『増一阿含経』である。

『須摩提女経』には、釈尊が烏持国を訪れた際に、悪龍が「密跡力士」を見て、釈尊に帰依したことが記されており、『増一阿含経』<sup>(11)</sup>は、これを釈尊が馬堤国を訪れた際のこととしている。<sup>(12)</sup>烏持国、馬堤国とはウッディヤーナを指すものと思われる。

『須摩提女経』、『増一阿含経』の記述は簡略であるが、『根本

説一切有部毘奈耶葉事』は、この故事の内容を次のように伝えている。涅槃を間近にした釈尊は、いまだ調伏すべき衆生が多くいることを思い、「金剛手葉叉」を連れ、アパラーラ龍王を調伏するために北インドへ出かける。龍王ははじめ、釈尊に抵抗し、電や雨や土塊などを降らせ、あるいは煙雲を放ち、攻撃をしかけてきた。これに対して、金剛手葉叉は金剛杵で山を打ち碎き、龍泉を潰す。龍王は恐れおののいて泉から出てくるが、そこで、釈尊が火界定に入つて十方を火焰につつむ。龍王は唯一の避難場所である釈尊の足下に逃げてきて、釈尊に帰依をしたという。<sup>(13)</sup>

アパラーラ龍王退治の伝説の多くは、これを釈尊が北インドを訪れた際の出来事としており、この伝説が北印度起源であることを伺わせている。『大唐西域記』は、ウッディヤーナ国のスワート河の水源地を、このアパ

### 密迹金剛力士の一考察



[図1] 舍衛城の神変

ラーラ龍王退治の故地であるとしている。<sup>(15)</sup>

梅尾祥雲は、この密迹金剛のアパラーラ龍王降伏と、インドラ（Indra）の悪龍ヴリトラ（Vṛtra）退治との関連性を指摘している。『リグ・ヴェーダ』<sup>(16)</sup>（Rgveda）には、水をせき止める悪龍ヴリトラを殺し、七つの河流を解き放ったインドラへの讃歌が、度々謳われている。旱魃の悪龍を退治し、水流を開放するといふの伝説は、アーリヤ人がインドに侵入する以前のインド・イラン民族共通の神話であった。ゾロアスター教の聖典『アヴェスター』（Avesta）にも、悪龍退治の説話が伝えられており、またインドラの異名「ヴリトラの殺害者」（Vṛtrahan）<sup>(17)</sup>を意味する「ウルスラグナ」（Verethraghna）<sup>(18)</sup>の名を持つ神が登場している。

このウルスラグナは、カニシュカ王やフヴィシュカ王のコインにも刻まれる戦神である。アパラーラ龍王退治の伝説が、パルチアやクシャーラの支配した地域を起源としていることを鑑みれば、この説話はヴエーダよりもむしろ、イランの神話と関連があるのかも知れない。

ガンダーラの仏教美術には、「アパラーラ龍王退治」を題材とした仮伝図の作例がいくつかある。これらの図には、恐れおののく龍王夫妻の頭上に、山に向って金剛杵を振り上げる密迹金剛が表現されており、『根本説一切有部毘奈耶集事』などの伝承とよく合致している〔図2〕。



〔図2〕アパラーラ龍王退治

#### ④降魔、帰城、般涅槃など

阿含經における密迹金剛の活躍の場は、それほど多くはないが、仏伝文学や大乗の經論の中には、釈尊の生涯における様々な場面に、密迹金剛が登場している。

たとえば、「大智度論」<sup>(2)</sup>には、次のような説話が伝えられている。釈尊が菩提樹下に座していた時、魔王は釈尊が成道するであろうことを憂い、三人の娘を釈尊のもとに送った。三人の魔女は釈尊を誘惑するが、釈尊が目もくれないので、人には好みがあるものだと思い、それぞれ五百人の美女を化作する。美女たちは媚態を示して、釈尊に触れようとするが、その時「密跡金剛力士」<sup>(2)</sup>が現れて、女たちを呵責し、偈頌を唱えたという。これによつて女たちは「小退」したと記されている。「大智度論」は、この他にも、デーヴアダッタが山から岩を落として釈尊に危害を加えようとした際に、「金剛力士」が金剛杵でこの岩を碎いたとする偉業を伝えている。

また、「賢愚經」では、釈尊が父王シユッドーダナの請いに応じて、カピラヴァストゥに帰城した際に、梵天、帝釈天、四天王とともに「八金剛力士」が釈尊を侍衛したといい、「僧伽羅刹所集經」<sup>(23)</sup>では、般涅槃に際し、「密迹金剛力士」<sup>(24)</sup>が嘆き悲しみ、釈尊を追慕する偈頌を説いたとしている。般涅槃におけるこのエピソードは、仏伝を伝承した人々に、特に好まれたようである。ガンダーラの仏伝図では、沙羅双樹の下に横たわる釈尊の側で、嘆き悶える密迹金剛力士の姿がしばしば表現されており「図3」、後には、このエピソードを主題とした「仏入涅槃密迹金剛力士哀恋經」<sup>(25)</sup>という経が成立するに至っている。また、「大唐西域記」<sup>(26)</sup>は、般涅槃に際して「執金剛」<sup>(26)</sup>が金剛杵を捨てて嘆き悲しんだとされる故地にストウーパが建立されていたことを伝えている。

これらの様々な密迹金剛をめぐる説話は、「根本說一切有部毘奈耶」<sup>(27)</sup>の中に集大成された。「根本說一切有部毘奈耶」には、アンバッタの降伏、悪龍退治、舍衛城神変、デーヴアダッタの陰謀のエピソードが、物語として最

も完成度の高い形で説かれている。またこれらの説話の他にも、転輪王に姿を変えたエーラパトラ龍王が釈尊の説法を聞きに来た際に、「龍王が本来の姿に戻つても危害を加えてはいけない」と釈尊が<sup>(31)</sup>「金剛手」に注意をうながすエピソードなども伝えられている。

## 二、クシャーン文化と密迹金剛力士

次に、これらの説話が伝承された背景を、仏典が翻訳され、仏伝図が制作された年代・地域から考察することにしたい。

中国で最初に翻訳された、密迹金剛が登場する經典は、『須摩提女經』『佛開梵土阿歎經』である。これらの經典の翻訳者とされている支謙は、後漢の獻帝（一八九～二二〇）の末に呉にやつてきたとされるから、『須摩提女經』に言及される惡龍退治や、『佛開梵土阿歎經』に説かれるアンバツタ降伏の説話は、二世紀には成立していたものと思われる。『出三藏記』の記述によれば、支謙は、大月氏の人で、祖父の代に中国に帰化したという。色は黒く、黃色の瞳を持つていたとされている。

支謙に次いで、密迹金剛が登場する經典を翻訳したのは、竺法護（二三九～三一六）である。竺法護は敦煌出身であるが、その先祖は月氏の人という。秦始元年（二六五）に、師に従い、西域諸国を遊歴し、多くの胡本をもたらしたとされる。<sup>(33)</sup>竺法護が翻訳した『密迹金剛力士經』は、前述のように、密迹金剛が主人公となつて、如



[図3] 般涅槃

來の秘密を開説するというもので、この中には、密迹金剛の授記や本生についても記されている。<sup>(34)</sup> 竹法護は西域諸国で仏典を手に入れたというから、三世紀頃の西域において、釈尊の侍衛者としての密迹金剛の存在は、広く知られていたものと思われる。

そのころの西域は、クシャーンの発展によつて開かれた交通路、中国からインド、さらにイランからローマへと至る、いわゆる「シルクロード」の途上にあつた。支謙や竺法護の祖先がその出身であつたとされる大月氏あるいは月氏は、このクシャーンを指す。<sup>(35)</sup> クシャーンは一世紀に西北インドを支配した北方の騎馬民族であり、その領土は二世紀のカニシュカ王の時代に、ガンジス河の中流地域にまで及んだという。多くの異民族から成る広大なこの大帝国では、東西の様々な文化が融合した。ことに北インド地方は、クシャーン建国のはるか以前、アレクサンダー大王の統治以来、ヘレニズム文化の影響を強く受けてきた。ギリシア人による統治が途絶えた後も、この地方では、ギリシア式の行政組織が採用され、行政用語としてギリシア語が使用された。この慣例はカニシュカ王の時代に至るまで続いていった。こうしたヘレニズム文化の影響は、この時期隆盛をきわめた、ガンドーラの仏教美術にも見てとることができる。



[図4] 草刈り人の布施

ガンドーラの仏伝図には、密迹金剛が頻繁に登場するが、この中で特に密迹金剛が好んで表現された題材は、「出城」「草刈

り人の布施」、「燃灯仏授記」、「アバラーラ龍王退治」などである。このうち、制作年代が最も古い「草刈り人の布施」図には、巻き髪で髭をたくわえたギリシア風の密迹金剛が表現されている〔図4〕。<sup>(36)</sup> 高田修はこのレリーフを二世紀の初めごろのものとしている。

ガンダーラの仏伝図における密迹金剛の尊容には、こうしたギリシア風のものが多く、この尊容に関して、しばしば密迹金剛とヘラクレスとの関係が指摘されている。<sup>(37)</sup> ヘラクレスは、棍棒によってネメアの獅子や、多頭の大蛇ヒュドランなどを退治した偉業によって知られるギリシア神話の英雄である。その尊像は、全裸あるいは短いキトンを着け、しばしばライオンの毛皮をかぶり、棍棒や弓を持つ姿で表現されている。

このヘラクレスは、イランに入り、ウルスラグナと習合したとされる。<sup>(38)</sup> ウルスラグナは、太陽神ミスマラに従う戦神であり、『アヴェスター』では大力を誇る神として描かれている。<sup>(39)</sup> この神もまた、多頭の悪龍アジ・ダカーハ退治の伝説をもつていたという。<sup>(40)</sup> ウルスラグナの尊像が、カニシュカ王やフヴィシュカ王のコインに刻まれていることは、先に述べたとおりである。カニシュカ王は、仏教の外護者として知られているが、イランの神々をも信仰していたことが、王のコインに刻まれた神像から伺える。

密迹金剛が、悪龍退治の偉業や、大力を持つという点で、ヘラクレスやウルスラグナと習合したことは想像に難くない。文献の中では密迹金剛の事蹟について言及していない「出城」や「燃灯仏授記」といった題材の中に、密迹金剛が好んで表現されていることは、この点において示唆に富んでいる。というのも、「出城」図のシッダルタ太子や、「燃灯仏授記」図の燃灯仏など、密迹金剛の侍衛の対象が、しばしば太陽神のイメージを持つていたからである。仏伝図を作成した者たちは、仏陀を表現する際に、既存の太陽神のイメージを採用したように、密迹力士を「太陽神に従う戦神」のイメージによって表現したにちがいない。

以上のように仏典と仏伝図が伝える伝承は、完全に一致している訳ではないが、これらは共に、密迹金剛が、二世紀から三世紀の西北インド、西域地方において、仏伝を通して広く親しまれていたということを証明している。

### まとめ

密迹金剛をめぐる説話の中で、阿含經が伝えているサッチャカ・アンバッタの降伏、悪龍退治は、比較的早くに成立したものと思われる。サッチャカ・アンバッタの降伏は、南伝・北伝共通の説話であるから、あるいは最も古い伝承であるのかも知れない。この説話のモチーフはインドの古典の中に見い出すことができ、ここで描かれている「金剛手薬叉」「密迹金剛」は、姿が見えないとされるインド古来のヤクシヤの性格を伝えている。

一方、悪龍退治は北伝のみに伝承された説話であり、この説話は、ウツディイヤーナなど、北インド地方と関連づけられている。ガンダーラでは、特に仏伝図の主題として好まれていた。また、この悪龍退治のモチーフが、インド・iran、さらにはギリシアの神話にも共通するものであつたことは先に述べた通りである。

インドの土着の鬼神であつた密迹金剛は、クシャーランという異民族が融合する文化土壤において、ヘラクレス、ウルスラグナといった大力を持つ神々と習合しながら、人々の尊崇を集めようになつたものと考えられる。そうした中で、『密迹金剛力士経』に見られるような、密迹金剛の本生や授記が創作され、あるいは『大智度論』や『根本說一切有部毘奈耶』に見られるような、様々な偉業が語られるようになつたのであろう。

以上、仏伝における密迹金剛の偉業と、ガンダーラの仏教美術から、密迹金剛をめぐる伝承が成立した背景を考察した。しかし、いかなる時代に、いかなる地域で、いかなる人々が、この密迹金剛を信奉するようになつたのかという問題に関しては、今回考察した西北インドの文化状況の他にも、考慮すべき点が多くある。たとえば、

マトウハーデ制作された仏三尊像では、蓮華手といふむじ、金剛手が仏の脇侍として表現されており、これが、密教の仏部・蓮華部・金剛部へと発展していったと考えられてゐる。また、南イランのスマラヴァティーの仏教美術にも、金剛手の作例が確認されており<sup>(43)</sup>、『大唐西域記』には、南イランに伝承される執金剛神の説話が伝えられてゐる。これらの問題については別の機会に考察するにいたしまし。

## 註

(1) 梅尾祥雲「金剛薩埵の前身としての金剛手の研究」『理趣

経の研究』梅尾祥雲全集第五巻、p.448-450、1982

神林隆淨「金剛手菩薩」「密教」1-2、p.56-60、1910

"Cūjasaccakasutta" (PTS "The Majjhima Nikāya" 1, p.231-232)

Atha kho bhagavā saccakam niganṭhaputtan etadavoca:

byākarohi dāni aggivesana nadāni te tuṇḍibhāvassa kālo.

Yo koci aggivesana tathāgatena yāvatatiyāṇ sahadhammikam pañhaṇ puṭho na byākaroti etthevassa

sattadhā muddhā phalatīti. tena kho pana samayena

vajirapāṇī yakkho ayasaṇ vajiram ḍāḍya adittam sampajjalitam sajotibhūtam saccakassa niganṭhaputtassa

uparivehāsaṇ thito hoti: sacāyāṇ saccako niganṭhaputto bhagavata yavatatiyāṇ sahadhammikam pañhaṇ puṭho na vyākarissati etthevassa sattadhā

byākarissati. Etthevassa sattadhā muddhaṇ phalessāmīti.

Taṇ kho pana vajrapāṇī yakkham bhagavā ceva passati.

saccako ca niganṭhaputto. Atha kho saccako niganṭhaputto bhīto sañviggo lomahaṭṭhaijāto bhagavantaṇ yeva taṇaṇ gaveṣī, bhagavantaṇ etadavoca:

"Ambarāhasutta" (PTS "The Digha Nikāya" 1, p.95)

Duiyampi kho ambarātho māṇavo tuṇṭi ahosi.

Atha kho bhagavā ambarātham māṇavaṇ etad avoca:

vyākarohi dāni ambarātha, na 'dāni te tuṇḍibhāvassa kālo. Yo

kho ambarātha tathāgatena yāvatatiyāṇ sahadhammikam pañhaṇ puṭho na vyākaroti etthevassa sattadhā muddhā phalassatīti.

Tena kho pana samayena vajirapāṇī yakkho mahantaṇ ayokujāṇ ḍāḍya adittam sampajjalitam sajotibhūtam ambarāthassa māṇavassa uparivehāsaṇthito hoti: sacāyāṇ ambarātho māṇavo bhagavata yāvatatiyāṇ sahadhammikam pañhaṇ puṭho na vyākarissati etthevassa sattadhā muddhaṇ phalessāmīti. taṇ kho pana vajrapāṇī yakkham bhagavā ceva passati ambarātho ca māṇavo. Atha kho

## 密迹金剛力士の一考察

ambat̄ho māṇavo tam disvā bhīto saṃvīgo lomahaṭṭhaijāto bhagavantamyeva tānam gavesī bharavantamyeva leṇam gavesī bhagavantamyeva saranaṃ gavesī upanisiditvā bhagavantam etadavocā:

(4) "Bṛhadāranyakopaniṣad" § 3 · 9

(5) 〔雜阿含經〕五 (大正一、二二六、a)

薩遮尼健子默然而住。佛告火種居士。速說速說。何故默然。如是再三。薩遮尼健子猶故默然。時有金剛力鬼神持金剛杵。猛火熾然。在虛空中臨薩遮尼健子頭上。作是言。世尊再三問。汝何故不答。我當以金剛杵碎破汝頭。令作七分。

佛神力故。唯令薩遮尼健子見金剛神。餘衆不見。薩遮尼健子得大恐怖。白佛言。、

〔增一阿含經〕三十 (大正一、二七一六、a)

是時尼健子默然不報。世尊再三問之。彼亦再三默然不報。是時密迹金剛力士手執金剛之杵。在虛空中而告之曰。汝今不報論者。於如來前破汝頭作七分。爾時世尊告尼健子曰。

汝今觀虛空中。是時尼健子仰觀空中。見密迹金剛力士。又聞空中語。設汝不報如來論者。當破汝頭作七分。見已驚恐。衣毛皆豎。白世尊言。、

〔長阿含經〕十三 (大正一、八三、a)

時彼摩納默然不對。如是再問。又復不對。佛至三問。語摩納言。吾問至三。汝宜速答。設不答者。密跡力士手執金杵在吾左右。即當破汝頭為七分。時密迹力士手執金杵。當摩納頭上虛空中立。若摩納不時答問。即下金杵碎摩納首。

佛告摩納。汝可仰觀摩納仰觀見密迹力士手執金杵立虛空中。見已恐怖。衣毛為豎。即起移坐附近世尊。依特世尊為救護。白世尊言。、

〔佛開解梵土阿頼經〕 (大正一、二二六〇、b)

佛問其祖。至三無對。金剛力士。舉大杵言。佛重問汝。

何故不對。阿頼懼曰。、

この他、「根本說一切有部毘奈耶集事」八 (大正二四、三二四、a)、「根本說一切有部毘奈耶雜事」三十四 (大正一四、三七九、b) にも、アンバッタの降伏譚が伝えられてゐる。

(7)

〔撰集百緣經〕十 (大正四、二五六、a) には、舍利弗の兄、長爪梵士が、仏教に回心する話が伝えられている。こでも、仏に論争を挑み、仏の問い合わせに答えられなくなつてしまつた長爪梵士の前に、「金剛密迹」が姿を現し、「答えることが出来ないと頭を打ち碎く」と長爪梵士に迫つている。

(8)

〔法句譬喻經〕三 (大正四、五九八、c~五九九、a)

結期七日當捨變化。王於城東平廣好地立一高座。高四十丈七寶莊校。施設幢幡整頓座席。二座中間相去二里。二弟子各坐其下。國王群臣大衆雲集。欲觀二人捨其神化。於是世尊即時迦葉與諸弟子先到座所登梯而上。、(中略)於是世尊即於座上燐然不現。即昇虛空奮大光明。東沒西現四方亦爾。身出水火上下交易。坐臥空中十二變化。沒身不現還在座上。天龍鬼神華香供養。讚善之聲震動天地。富蘭迦葉自知無道。

(9)

低頭慚愧不敢舉目。於是金剛力士舉金剛杵。杵頭火出以擬迦葉。何以不現卿變化乎。迦葉惶怖投座而走。五百弟子奔波迸散。

【賢愚經】二（大正四、三六三、a）

又第八日受帝釋請。爲佛作師子座。如來昇座。帝釋侍左。梵王侍右。衆會一切。靜然坐定。佛徐申臂。以手接座。欵有大聲。如象鳴吼。應時即有五大神鬼。摧滅挽拽六師高座。金剛密迹捉金剛杵。杵頭出火。舉擬六師。六師驚怖奔突而走。慚此重辱。投河而死。六師徒類。九億人衆。皆來歸佛。求爲弟子。

【菩薩本生鬘論】二（大正三、三三六、a～b）

次第八日帝釋天主知佛世尊攝化邪黨。下降人間請佛供養。爲佛造作七寶嚴飾師子之座。佛坐其上光明煥赫。釋梵諸天侍立左右。一切衆會寂然安坐。是時如來舒金色臂以手按座。欵然有聲如象王吼。應時即有五大藥叉。摧壞挽拽六師之座。密迹金剛杵頭出火。舉擬六師驚怖奔走。慚此重辱溺水而死。六師徒屬九萬人衆。皆歸依佛願爲弟子。

（c）  
【根本說一切毘奈耶雜事】二十六（大正二四、三三三、a）

時王即起偏露右肩合掌向佛白言。世尊。我今請佛共諸外道現其神變上人之法。降伏外道慶悅人天。令敬信者倍復增長。其未信者作信因緣。令於未來沙門婆羅門人天大衆。

皆蒙利益長夜安樂。佛受王請默然而住。王知受已復座而坐。爾時世尊便入如是勝三摩地。便於座上隱而不現。即於東方

虛空中出。現四威儀行立坐臥。入火光定出種種光。所謂青黃赤白及以紅色。身下出火身上出水。身上出火身下出水。如於東方南西北方亦復如是現其神變。既現變已即還收攝。於師子座依舊而坐。……（中略）時勝光王告六師曰。大師世尊已現神變。仁等今者可作神通。時外道晡刺拏默無所答。即便以肘觸末羯利瞿舍梨子。如是向末展轉相觸。乃盡六人竟無一人敢爲應對。再三王命令現神通。時彼六師還相築觸。

同前默爾縮項低頭。如入深禪意無酬酢。時金剛手大藥叉主作如是念。此六癡物久惱世尊。須作方便令其改往。更不敢然悉皆逃竄。作是念已即放猛風雨雹交注。彼神通舍隨處崩摧。外道邪徒並皆離散。

（10）

この図は「双神変」と呼ばれるが、この他、舍衛城の神変の説話には、仏が諸仏を化現する神変を説くものもあり、これを主題にした「千仏化現」図もある。

（11）

【須摩提女經】（大正二、八三九、c）

復至烏持國 復值惡龍王 見密迹力士 而龍自歸命

（12）

【增一阿含經】二十二（大正二、六六一、c）

復至馬提國 復值惡龍王 見密迹力士 而龍自歸命

（13）  
ただし、元本、明本は烏仗國、正倉院聖語藏本は馬持國としている。

【根本說一切有部毘奈耶藥事】九（大正二四、三九、c）

（14）  
是時世尊便作是念。我今於此壽命短時。出現於世。涅槃時到。有多調伏事故。應可須作。我若共阿難陀苾芻。詣北

## 密迹金剛力士の一考察

- (16) 天等國。爲調伏事。難可得成。今者應可共金剛手藥叉。往  
彼調伏。、（中略）爾時世尊告金剛手藥叉曰。汝可共我。  
往北天竺。調伏阿鉢羅龍王。唯然。世尊。其金剛手藥叉。  
共世尊乘空而往。、（中略）爾時世尊告金剛手藥叉。汝可  
共我詣無稻芋龍王宮中。唯然。世尊。爾時如來。與金剛手  
藥叉。到龍王宮中。于時無稻芋龍王。既見世尊到於宮裏。  
便即瞋怒。念起害心。發諸煩惱。上昇虛空。降注電雨。并  
諸土塊。于時世尊知龍瞋怒。便即運想。入慈心定。既入定已。  
所注土塊。於如來上。變爲沈檀多摩羅末香等。如雲而下。  
時龍既見不害世尊。便即放輪及諸兵器。尋即化爲四色蓮華。  
空中而下。是時無稻芋龍王遂放煙雲。爾時如來以神通力。  
亦放煙雲。于時龍王貢高狂慢因斯除息。遂便入宮。止息而  
住。爾時世尊便作是念。由二種因。能得降伏一切惡龍。或  
令怕懼。或令瞋怒。然此龍王合受怕懼。作是念已。告金剛  
手藥叉曰。汝可惱觸此惡龍王。爾時藥叉受如來教。以金剛  
杵。擊破山峰。其山既倒壓半龍池。是時龍王憂愁怕懼。即  
欲逃竄。爾時世尊入火界定。令其十方。悉皆火聚。是時龍  
王逃走無路。唯世尊足立之處。寂靜清涼。是時龍王詣世尊  
所。頂禮雙足。
- (17) 15) 〔大智度論〕九（大正二五、一一六、b）は北天竺月氏国、「阿育  
王伝」一（大正五〇、一〇一、b）は烏長國（うじょうこく）といふ。  
〔大唐西域記〕三（大正五一、八八二、b～c）  
曹揭釐城東北行二百五六六十里入大山。至阿波邏羅龍泉。
- (18) (19) (20) (21)
- (16) 即蘇婆伐窣堵河之源也。
- (17) 梅尾祥雲「金剛薩埵の前身としての金剛手の研究」「理趣  
經の研究」梅尾祥雲全集第五卷 p.442-443  
"Rgveda" § 1-32
- (18) "The ZEND-AVESTA"2 ("Sacred Books of the  
East" vol.23, Translated by J.Darmesteter, Oxford  
University Press, 1883) p. 61-62, p.113, p.242, p.254
- (19) "The ZEND-AVESTA"2 ("Sacred Books of the  
East" vol.23, Translated by J.Darmesteter, Oxford  
University Press, 1883) p. 238-248
- (20) 田辺勝美「カニハカ」廿世金貨の國王立像考 焰肩の起源  
と意義」[仏教芸術] 156, p.58, 1984
- (21) 〔大智度論〕十四（大正二五、一六五、b～c）  
如釋迦文尼佛在菩提樹下。魔王憂愁遣三玉女。一名樂見。  
二名悅彼。三名渴愛。來現其身作種種姿態欲壞菩薩。菩薩  
是時心不傾動目不暫視。三女念言。人心不同好愛各異。或  
有好少或愛中年或好長好短好黑好白。如是衆好各有所愛。  
是時三女各化作五百美女。一一化女作無量變態從林中出。  
譬如黑雲電光暫現。或揚眉頓睫嫋嫋細視。作衆伎樂種種  
姿媚。來近菩薩欲以態身觸逼菩薩。爾時密跡金剛力士瞋目  
叱之。此是何人而汝妖媚敢來觸燒。爾時密跡說偈呵之。汝  
不知天命。失好而黃鬚。大海水清美。今日盡苦鹹。汝不知  
日滅。婆敷諸天墮。火本爲天口。而今一切噉。汝不知此  
事。敢輕此聖人。是時衆女遂巡小退。語菩薩言。、

(22)

〔大智度論〕十四（大正二五、一六五、a）

爾時提婆達多便生惡心推山壓佛。金剛力士以金剛杵而遙擲之。碎石迸來傷佛足指。華色比丘尼呵之。復以拳打尼。尼即時眼出而死。作三逆罪。

(23)

〔賢愚經〕十二（大正四、四三三、c）

於時如來與大眾俱。八金剛力士。住在八面。時四天王。各在前導。時天帝釋。與欲界諸天。侍衛其左。時梵天王。與色界天。侍衛其右。諸比丘僧。列在其後。佛在衆中。放大光明。暉曜天地。威踰日月。普與大眾。乘虛而往。

この他、「分別功德論」五（大正二五、五〇、a）にも、帰城の際、「密迹力士不釈尊を侍衛したことを説いている。ここでは、右に優頭槃比丘、左に密迹力士がひかえたと説いている。

(24)

〔僧伽羅刹所集經〕下（大正四、一四三、c）

是時世尊臨欲般涅槃時。告諸比丘。汝等比丘。有所狐疑。便可時間。乃至一切行無淨常云何。尊者阿那律。世尊般涅槃耶。是密迹金剛力士立如來後。觀如來顏色支節筋骨。皆悉牢固堪任重任。亦堪任說微妙之法。即啼泣而作是說。無垢無衆瑕。世間失覆蓋。猶彼紫磨金。今當捨衆去。猶如此。

(25)

〔仏入涅槃密迹金剛力士哀恋経〕（大正NQ、三九四）

世間年熟時已過。釋種釋迦文無想永寂滅。

普賢寂滅側有窣堵波。是執金剛蹙地之處。大悲世尊隨機利見。化功已畢入寂滅樂。於雙樹間北首而臥。執金剛神密

(27)

〔根本說一切有部毘奈耶乘事〕八（大正二四、三四、a）

述力士。見佛滅度悲慟唱言。如來捨我入大涅槃。無歸依無覆護。毒箭深入愁火熾盛。捨金剛杵閼絕墮地。久而又起悲哀戀慕。

(26)

〔大正NQ、三九四〕

註9 參照

(27)

〔大正NQ、三九四〕

註13 參照

(28)

〔根本說一切有部毘奈耶破僧事〕十八（大正二四、一九二、

c）

(29)

〔根本說一切有部毘奈耶破僧事〕十八（大正二四、一九二、

c）

註9 參照

(30)

〔根本說一切有部毘奈耶破僧事〕十八（大正二四、一九二、

c）

註13 參照

爾時世尊從座而起。將入深山巖穴之內。于時提婆達多。與五百人發機飛石直擊如來。時執金剛神。以金剛杵於虛空中打石令碎。其石一片欲墮佛身。時金毘羅藥叉接石不著。

## 密迹金剛力士の一考察

- (31) 遂打自身。從斯逆落損世尊足。  
〔根本說一切有部毘奈耶雜事〕二十一（大正一四、二〇四、  
a）
- 龍王白言。世尊我是龍身多諸怨惡。恐有衆生共相損害。爾時世尊告金剛手曰。汝可護此龍王勿令損憐。時金剛手受世尊語已便爲守護隨後而行。是時龍王從坐而起。別至一處。遂復本形。
- (32) 〔出三藏記集〕十三（大正五五、九七、b～c）
- 〔出三藏記集〕十三（大正五五、九七、c～九八、b）
- (33) 密迹金剛の授記
- 〔大寶積經〕八（大正一一、六七、c～六八、c）
- 密迹金剛の本生
- 〔大寶積經〕八（大正一一、七四、a～七五、b・七九、  
b～七九、c）
- (35) 祁連山のふもとにいた月氏が、匈奴に追わられて西に移動し、大夏を滅ぼし、B・C一四〇年ころに建国したのが、大月氏国である。クシャーラは大月氏の一部族とも、大夏の一部族ともいわれるが、四五年ころ、他の部族を統一して、クシャーラ朝を起こした。大月氏とクシャーラとは異なるが、「後漢書」以降、中国ではこれを同一視している。よつて「出三藏記」に大月氏、月氏とあるのは、クシャーラを指すものと思われる。
- (36) 高田修「仏像の起源」、岩波書店、1967、p.215-221
- (37) 入澤崇「鬼神の仏教 護法神執金剛と菩薩金剛手」（「印度
- (38) 田辺勝美「アロアスターの神秘思想」講談社、1988、p.163  
と意義」（「仏教藝術」156、1984）p.57
- (39) 岡田明憲「アロアスターの神秘思想」講談社、1988、p.163  
"The ZEND-AVESTA"<sup>2</sup> ("Sacred Books of the East" Vol.23, Translated by J.Darmesteter, Oxford University Press, 1883) 「ဘားဘားဟား၊ ယာဟမား (bahārām yast)」 p. 238-248 参照。
- (40) 田辺勝美「カニシュカ一世金貨の國王立像考 焰肩の起源」と意義」（「仏教藝術」156、1984）p.58
- (41) 田辺勝美「カニシュカ一世金貨の國王立像考 焰肩の起源」と意義」（「仏教藝術」156、1984）p.58
- (42) 田辺勝美「ガンダーラ美術に対するササン朝文化の影響」（「日本オリエント学会創立35周年記念オリエント学論集」、1990）
- 岡田明憲「アロアスターの神秘思想」講談社、1988、p.161  
（43）頼富本宏「金剛薩埵図像観え書（上）」（「密教圖像」1, 1982）p.36-37
- (44) 石黒淳「金剛手の系譜」（「密教美術大觀」3, 1984）p.183-184
- (45) 〔大唐西域記〕十（大正五一、九三一、a～b）
- 学仏教学研究】33-1, 1984) p.144

現代密教 第14号

※図版出典 栗田功『ガンダーラ美術』1  
佛[仏]、11本社、1983

図  
4

図  
1

図  
2

図  
3

図  
4

No.380 Victoria & Albert Museum 所蔵

No.453 Peshawar Museum 所蔵

No.482 Victoria & Albert Museum 所蔵

No.207 Peshawar Museum 所蔵